

『音楽教育学』『音楽教育実践ジャーナル』共通 執筆の手引き

2009年5月10日作成（2025年11月16日最終改訂）

1. 基本的な注意事項

1. 1 書式等に関すること

『音楽教育学』『音楽教育実践ジャーナル』には多様な原稿が寄せられます。そうしたなかで、学術誌にふさわしい一定の水準を保ちつつ、読者にわかりやすい誌面とするために、執筆者にはルールに則った書き方をお願いしています。音楽教育に関わる研究論文等の書き方は必ずしも一つに定まってはいないものの、現時点においてよりよい誌面をつくるための方策として、投稿規程に加えて標準的な書式の「手引き」を作成し、次項「2. 書式の一般原則」で詳しく示しました。執筆に際して確認してください。

研究分野によってこの書式で不都合がある場合には、学術的に裏付けられた何らかの一貫した書式による投稿をお願いいたします。

1. 2 倫理に関するこ

執筆者は原稿の内容及び手続き全般において、すべての人の人権と尊厳を尊重することが社会的に求められます。とくに、研究・実践対象者や協力者の人権の尊重及びプライバシーの保護は、十分に配慮されなければなりません。執筆者はまた、著作権・版権等への十分な配慮も求められます。その他にも、オリジナル原稿（公刊されたもの、他所で審査中のもの、印刷中もしくは印刷予定のものと同一または同等ではないもの）を投稿すること、二重投稿（投稿から審査結果が通知されるまでの期間に同一論文または同等の論文等を他に投稿すること）や自己剽窃（同一著者が、すでに発表された論文等または出版予定の論文等と、同一またはきわめて類似性の高い内容の論文等を投稿・寄稿すること）の禁止などは、執筆者みずからが責任をもつべきことといえます。

こうしたことは基本的には執筆者自身の自律性に委ねられるものです。執筆者にはテンプレート冒頭にある【投稿者用チェックリスト】の該当する全項目にチェックをお願いしておりますので、依頼原稿の場合にも一度ご確認ください。それぞれの項目の要請をどの程度満たすべきかの判断は原則として執筆者に委ねますが、原稿の内容によっては、編集委員会が執筆者に対して事情を問い合わせ、場合によっては以下のような確認を求めることがありますのでご了解ください。

- ・研究参加者（調査対象者や被験者、観察対象者等）による「同意書」等。
- ・投稿原稿中に使用されている写真の権利者、または、被写体となった人（またはその保護者や責任者）による「写真等使用許諾書」等。
- ・投稿原稿中の楽譜、図表、図版等の引用についての、著作権者等による「転載許諾書」等。
- ・投稿原稿と内容的に関係の深い、同一著者による公刊または公刊予定の論文等のコピー。

倫理に関する事項については、日本音楽教育学会（2024）『音楽教育にかかわる人の倫理ガイドブック－研究と実践に向き合うために』（増補改訂版）に詳しく述べられていますので、ご参照ください。この倫理ガイドブックは、学会ウェブサイトのメニューを開き「学会データ資料室」をクリック

すると閲覧できます。

1. 3 送付に関するここと

投稿原稿

『音楽教育学』ならびに『音楽教育実践ジャーナル』のすべての投稿原稿は、原則としてオンライン投稿です。投稿にあたっては、学会ウェブサイトの「オンライン投稿マニュアル」を参照してください。

2. 書式の一般原則

2. 1 記述上のルール

文章作成の共通のルールや一貫性のある書式にしたがって、必要な情報が正確にわかりやすく読者に伝えられるよう執筆をお願いします。実際には種々の論文執筆法があり、そのいずれが正しいということはできませんが、ここで示す標準的な書式の原則は、一貫性のあるわかりやすい誌面とするために作成された手引きです。以下の書式と異なる表記をする場合でも、かならず学術的に裏付けられた書式およびルールに則った表記を一貫して用いるようご配慮ください。

1) ページ設定

A4 判用紙に横書きで、Word 等で作成する。

『音楽教育学』ならびに『音楽教育実践ジャーナル』では 23 文字×35 行の 2 段組（1 段組の部分は 46 文字×35 行）の仕上がりとなるため、テンプレートを使って作成する。

本文の日本語の書体は、MS明朝を選択すること。MSP明朝のように字間調整機能をもつフォントは字数が変わってくるため使用しない。ボールド（太字）機能も使用しない。また、英文の書体は、Times New Romanを選択する。日本語で半角数字を挿入するときは、自動でCenturyが選択されることが多いので、気をつけること。項目見出し、本文、注、引用・参考文献のフォントサイズは 10.5 ポイントとする。項目見出し等には MS ゴシック を用いること。

譜例、図版、図表、写真等は、刷り上がりを考慮して文中に埋め込むか、適切なスペースをあけて挿入箇所に図 1、表 1、譜例 1 等を明示する。この場合必要に応じて部分的に 1 段組にしてもよい。『音楽教育学』および『音楽教育実践ジャーナル』に掲載される場合、B5 版に縮小されることを想定して、図表等は文字サイズを最低 10 ポイント以上とし、字間、行間を過度に詰めないようにする。これに逸脱していると判断された場合、原稿は受けつけられないことがある。

原稿の種類に応じたテンプレートを学会ホームページからダウンロードして使用すること。原稿の種類に応じた分量およびページ設定については、『音楽教育学』および『音楽教育実践ジャーナル』投稿規定を参照すること。

2) 全角文字と半角文字

和文では、漢字、ひらがな、カタカナのほか、句読点や括弧等の記号を含め、原則としてすべて全角文字を用いる。

2 衢以上の算用数字は、Times New Roman 半角文字を用いる（1 衢の場合は MS 明朝全角、但し、「A4」のようにアルファベットに 1 衢の数字が続く場合は Times New Roman 半角文字を用いる）。西暦年号以外で 4 衢以上の数字の場合は、3 衢ごとに半角の「,」をつける。

3) かなと漢字

引用、術語を除き、原則として常用漢字、現代かなづかいを用いる。

通常、機能語（「こと」「もの」などの形式名詞や「したがって」「なお」などの接続詞）は、かな書きにすることが望ましい。また、同じ語（あり方と在り方、できると出来る、など）はかなと漢字を混用せず、文中で一貫した使用法となるようにする。

4) 算用数字と漢数字

数字は原則として算用数字を用いる。漢数字を用いるのは、「一字一句」「一端」「第三者」など算用数字では不自然な場合、固有名詞、「一期一会」のような慣用句である。

「一つ」は、漢数字または「ひとつ」とかなで表記する。「第1に」「第一に」は、いずれでもよいが、一貫した使用法となるようにする。

5) 年号

年号表記は原則として西暦を用いる。元号による表記を併記する場合は、西暦のあとに（ ）で表示する。なお、明治以降はアルファベットで略記してもよい。

例：1945（昭和 20）年 1872（M5）年

6) 欧文

英文のタイトルは、前置詞、冠詞、不定詞を除いて単語の冒頭をすべて大文字とする。ただし、4 文字以上の前置詞については小文字とせず、大文字とする（以下の例文では *within* が4 文字以上であり、大文字で記されている）。

例：Musical Cognition Within an Analogical Setting: Toward a Cognitive Component of Musical Aptitude in Children

英文要旨、および本文中に欧文を書く必要がある場合には、すべて半角文字を用いる。大文字だけの単語（たとえば CD）であっても、欧文文字は半角文字を用いる。

名前のお部を頭文字だけで表す場合などは、省略を表すピリオドを打ち、半角スペースを入れる。

例：シェーファー、R.□M.□（□は半角スペースを表す）

欧文の諸記号類「.」「,」「:」「;」「?」「!」「」も半角文字を用い、これらの後には半角スペースを入れる。

例：Cheston, H., Cross, L., & Harrison, P. (2024). Trade-offs in Coordination Strategies for Networked Jazz Performances. *Music Perception*, 42(1), 48–72

7) 句読点

和文の読点には「、」を、句点には「。」を、いずれも全角で用いる。

和文の際には、原則として疑問符？や感嘆符！を使用しない。

本文中に「」付きの文を表記し、地の文章がそのまま続く場合には、閉じた括弧の前の句点は不要である。

例：それは「音楽の持つ力を考える」ということなのである。

そこで地の文章が終わる場合、句点は閉じた括弧のあとにつける。割注などの（）についても同様である。

例：用いられる場合もある（このような楽章は、单一主題楽章と呼ばれる）。

8) かっこ類

以下の一般的な用法を原則とし、和文ではすべて全角、欧文では半角を用い、半角の場合は文字が詰まりすぎないように半角スペースを入れる。

記号	名 称	用 法
「」	ひとえかぎまたはヒッカケ	和文の短い引用（引用文中に「」が使われている場合には『』に変える） 会話文 語句の強調 和文の論文名や本の一部の章名（書名や雑誌名に使ってはならない）
『』	ふたえかぎまたは二重ヒッカケ	和文の書名や雑誌名 欧文の書名には使わない（欧文の場合はイタリック体にするかアンダーラインを引く） 「」内の「」は『』に変える
()	丸かっこまたはパーレン	補足的な説明（ダッシュを使用してもよい） 引用した文献情報などの注記 原語表示 例：口頭伝承（oral transmission）
[]	亀甲かっこ	引用文と、引用者の補足・修正、および、聞き取り資料への聞き取り者の補足、注釈の付記を区別するために用いる 例：ここ〔長崎海軍伝習所〕で伝習された…… なお、〔〕（角ブラケット）とは別もので、〔〕は同じ語の言い換えにまれに用いられる
< >	ギュメまたは山パーレン	概念の強調 一般的な語句に特殊な意味をもたせる場合
《》	二重ギュメまたは二重山パーレン	作品名、教材名 例：《早春賦》 欧文の作品、教材名には使わない（欧文の場合にはイタリックかアンダーラインを引く）。ただし、作品名が欧文であっても日本語の歌の場合には《》を使ってよい。例：嵐《GUTS!》

9) 記号

以下の一般的な用法を原則とする。

特に、長音記号〔=音引き〕(ー)、漢数字のイチ(ー)、全角ダッシュ(ー)、マイナス(ー)、ハイフン(-)はまぎらわしいので、注意して区別する。

和文では全角、欧文では半角の記号を用いる。

半角の「.」「，(半角カンマ)」「:」「;」「?」「!」を使用したあとにはかならず半角スペースをあけるが、数字を区切るための半角「,」の後にはスペースを入れない。

記号や強調（強調文字、アンダーライン、傍点）については必要性を判断して用いる。

・	中グロ	単語の並列 (and の意味をもつ) 外国語の単語間の分かち書き ＊全角分を使用する
・	ピリオド	欧文単語または名前の省略 ＊半角分を使用し、この後に半角スペースをとる
……	3点リーダー	省略（1マスに3点で2マス使用）
—	ダッシュ（全角）	副題の前後は～ではなく、—（全角）ダッシュを用いる (欧文の副題にはダッシュではなく「:」コロンを用いる) 補足的な説明や語句を文章で補足する際の挿入文の前後
-	ハイフン	和文の場合は2つの概念の密接な連関を示す 欧文の場合は単語を結びつける合成語、行をまたいで分綴するときに用いる 和文・欧文ともにページ数や年号で A-B で「A から B まで」を示す (例) pp. 50-51 1685-1750 年
=	二重ダッシュ	外国語の固有名詞をカタカナ書きする際の分節
=	イコール	語句の意味の同一性を示す
?	疑問符	いずれも通常の和文では用いないが、聞き取りやフィールドデータでは使用することがある
!	感嘆符	語句の強調
・ 音楽	傍点または強調点	なお、引用文中に傍点を使用する際は、傍点が引用者によるものか原文に付されたものかを区別すること
おんがく 音楽 ママ 音学	ルビ	ふり仮名 引用文中に誤字がある場合、該当語の上に（ママ）とルビをふる

10) 人物表記

投稿者自身の原稿について触れる場合には、審査の公正を期するため、「拙著」「拙論」といった表記も含めて投稿者名が判明するような記述をしない。また、研究助成、共同研究者への謝辞など、投稿者名や所属機関が判明、推測できるような記述もしない（これらの情報は、採択後に加筆することができます）。

氏、教授、先生など、敬称は原則としていれない。

文中に同じ人物の名前が何度も出てくる場合は、初出のみフルネームで表記して、原則として2回目からは姓のみとする（同じ姓の人物が複数ある場合はこの限りではない）。

例：伊澤修二は信州伊那の高遠の出身である。伊澤は、……

引用文献情報として（ ）内に出版年等とともに名前を示す場合は姓のみでよい。

外国人表記は、原則として初出のみ（ ）内に原綴、必要な場合には生没年を示す。名前をイニシャル表記とするか、原綴のままでするかカタカナ表記にするかは、原稿全体を通して他の人物と一貫性をもたせる。

11) 固有名詞

出版社の綴りや句読点など、登記上の名称を正確に記載する。

例：正 音楽之友社，誤 音楽の友社 ／ 正 東京大学出版会，誤 東大出版会

12) 図、写真、譜例および表

図、写真、譜例には、図1、図2のように通し番号をつけ、番号ごとに表題を作成する。この通し番号、表題は図の下部に記載する。

図は、図中の文字が原則10ポイントを下回らないようにする。楽譜も図として扱う。B5判に縮小した際に見づらくならないよう、音符や歌詞の大きさ、五線の幅などにも留意する。

表も表1、表2のように通し番号、表題をつけて作成するが、図と異なり表の上部に記載する。表の大きさも、文字が10ポイントを下回らないようにする。

図、写真、譜例および表に関しては必要に応じて部分的に1段組にしてもよい。これらは、刷上りがB5判となることを考慮して適切なスペースを確保する。

2. 2 注について

【注】と【引用・参考文献】は区別する。【注】は本文中では記述しづらいことを本文の流れを妨げずに説明するために用い、【引用・参考文献】が一覧で示された方が読者にわかりやすい。

本文中の当該箇所の終わりに、通し番号で¹⁾ ²⁾ のように丸かっこ付きアラビア数字の上付き文字で示し、説明文は最後にまとめて番号順に記載する。ワードの脚注機能は使わない。

説明文は、本文が終わった後に1行あけて【注】と表示し、次の行から記載する（印刷上は脚注となる）。また、【注】【引用・参考文献】ともに文字のポイントを下げたり、行間を詰めたりしないで、本文と同じ書式を用いる。

かっこ類のついた語句に対して注をつける場合はかっこ類を閉じたあとに注番号をつける。

例：この「さいころ音楽」¹⁾とは、

注と句読点が隣接する場合は句読点の前に注番号をつける。

例：……ということができ²⁾、……である³⁾。

2. 3 引用と参照

1) 文中における表記

文献から直接引用する場合には、引用ページも示して原文に忠実に引用する。

短い引用は、「 」でくくる。引用する文中に「 」が含まれている場合、その「 」は『 』に置き換える。引用を終えてひとえかぎを閉じたら、丸かっこで（著者姓〔出版年,〕引用ページ）の文献情報をつける（〔〕は半角スペースを示し、出版年のあとカンマは半角）。

著者名が文中でる場合は文献情報のなかで繰り返す必要はない。

例：誤 森田（森田 2000, p. 22）が言うように、正 森田（2000, p. 22）が言うように

例：と結論づけた調査も存在する（大木 1998）。

例：小泉（1980, p. 224）が述べるように、「『かーごめ、かごめ』などの言い方は、こど

もにとては全く自然な方法」であるが……

引用文の末尾に句点があっても、地の文章がそのまま続く場合には、閉じた括弧の前の句点は不要である。引用文をもって地の文章も終わる場合、ひとえかぎを閉じ、丸かっこで文献情報を示した後に句点をつける。

例：しかし、小泉（1980）が述べるように、「……さまざまな声が魅力あるものとして生かされている」ということができる（p. 80）。

例：しかし、小泉（1980）が述べるように、「さまざまな声が魅力あるものとして生かされている」（p. 80）。

長い引用は上下に一行をあけ、引用文の各行は左側を全角で1文字分、字下げする（以下の例を参照）。引用文を「　」でくくることはしない。引用文末尾には、丸かっこで（著者姓〔出版年、引用ページ）の文献情報をつける。この際、句点を打ってから丸かっこを開始する。

例：ヴィゴツキーは次のように述べている。

〔1行空ける〕

□芸術は、このような弁証法的で、行動を建て直すような情緒をそれ自身のなかに抱いている。それゆえ、芸術は、つねにカタルシスによって解決される内面的戦いのきわめて複雑な活動を意味する。（ヴィゴツキー 2005, p. 258）

〔1行空ける〕

つまり、ここで言われていることは……

文献情報に記す著者は姓のみとする。共著の場合、和文の姓はナカグロ、アルファベットは and または&で併記する。3名以上の共著は、ファーストオーサーのみ記し、「ほか」 et al. をつける。

例：（伊澤・目賀田 1880, p. 278） （Mason et al., 1874）

著者姓と出版年（数字のみで「年」は記さない）の間には半角スペースをあける。出版年と引用ページの間には半角カンマと半角スペースを入れ、引用ページは半角小文字を用いた「p.」のあとに表示する。複数ページにわたる場合は、「pp. ○ - △」のように「pp. 」とハイフンを用いて記す。同一著者に同一出版年の文献が複数ある場合は、出版年の後に a, b と、小文字のアルファベットを順につけて区別する。

例：（伊澤 1892b, p. 78） （メーソン 1900, p. 11）

引用文中に誤字・脱字がある場合は、原文の（誤った）まま転記し、当該語句の上に（ママ）とルビを付す。強調の傍点がもともとついている場合には（傍点原文）、原文にない傍点を打つ場合は（傍点引用者）として区別する。補足説明は〔 〕に入れて原著者によるものと執筆者によるものを区別する。

例：大切な要素を補うことを^{ママ}目適としている

引用文が歌詞などで頻繁に改行されているが、引用する際に改行しないで詰めたい場合には本来の改行箇所に「／」をはさんで同じ行に続ける。

例：雁雁鳴いた／大きな雁も鳴いた／小さな雁も鳴いた／がをがを鳴いた

聞き取りやフィールドノーツなどのフィールドワーク資料、新聞記事、ホームページからの引用についても、書式は上記の短い引用、長い引用と同様である。フィールドワーク資料の場合は注をつけて、年月日、場所、対象者などのデータを明示する。新聞記事は、丸かっこで（新聞名〔発行年月日、朝夕刊の別）のように示し、必要に応じて面数、○○地方版などの情報を付記する。

「参照」は、文献からそのままの引用ではなく、要約や解釈を踏まえた記述をすることで、この場合も（著者姓〔出版年〕必要に応じて参照ページ）のように文献情報を記す。

同一著者の複数の文献を参照した場合は、各文献の発行年の間に「,」を入れる。また、読者に参考を求める場合は「著者姓（出版年）を参照のこと」のように表示する。

直接引用の総分量については、不必要に多くならないように注意する。

2) 【引用・参考文献】における表記

引用・参考文献は注に続いて本文の最後にまとめて記載する。

本文中で引用・参照した文献は過不足なく記載し、引用・参照していない文献は掲載しない。

欧文、和文の順に区別し、欧文は著者姓のアルファベット順、和文は五十音順に記載する。和文に翻訳された文献は和文の一覧に含める。

同一著者の文献は発行年の順に並べ、同一年に2冊以上の場合、2007a、2007b、と区別する。

文献は、著者姓名、発行年、書名、（出版地）、出版者を示し、論文等は、著者姓名、発行年、論文題目名、掲載誌名、巻号、全文の掲載ページを示す。執筆者不祥の場合は、書名を冒頭にし、文献リストの最後にまとめる。訳書の場合、必要に応じて原書の出版年も示してあると読者にとっては親切である。2行以上にわたる場合は、同一文献に関わる2行目以下は左を1字分下げる。

インターネット上の資料（電子ジャーナル、オンライン新聞・週刊誌、ネット上の電子テキストなど）の場合、著者姓名、記事名、雑誌・新聞名、巻号数、（発行所）、刊行年（月・日）、（掲載全ページ数）、オンライン（文献・情報を閲覧した場所〔HPの名称など〕）、使用したコンピュータ・ネットワーク名（インターネットなど）、アドレス、アクセスした日を記す。

その他のネット上の情報を使用した場合も、少なくとも著者名、記事・論文名、情報を閲覧したネット上の場所、使用したコンピュータ・ネットワーク名、アドレス、アクセス日について記す。

なお、引用・参考文献の欧文表記については、原則として米国心理学会（American Psychological Association, APA）が発行している *Publication Manual of the American Psychological Association*／『APA論文作成マニュアル』の最新版を参考とすること。

和文文献の例：

単行本

小泉文夫（1958）『日本伝統音楽の研究I』音楽之友社。

ザックス、C.（1969）『音楽の起源』皆川達夫・柿木吾郎訳、音楽之友社。

中島恒雄・斎藤博（1981）『音楽教育研究のまとめ方』建帛社。

雑誌記事

西條八十（1922.7）「童謡について」『教育研究』242号、pp. 83-89.

辞典の記事

平野健次（1991）「箏曲」『新訂 標準音楽辞典』音楽之友社, pp. 1011-1013.

執筆者記載のない辞典等の記事

『新訂 標準音楽辞典』(1991)「有節歌曲」音楽之友社, p. 2026.

楽譜

ヘンデル, G. F. (1976) 『クラヴサン曲集1』ルドルフ・シュテークリヒ校訂, 渡部恵一郎
訳, ベーレンライター原典版11, 全音楽譜出版社.

インターネット

文部科学省「卒業後の状況調査 大学」平成20年度学校基本調査, インターネット,
<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat>List.do?bid=000001015835&cycode=0> (2009/4/1にアクセス)

文献以外のCD等は【参考資料】として【引用・参考文献】の後に記載する。

例：CD

中島靖子『《落葉松》中島靖子作品集』中島靖子・正派合奏団, ビクター伝統音楽文化振興財団
VZCG-242, CD, 2001年録音.